

文化資産のデジタルアーカイブが拓く、新たな創造への道

デジタルアーカイブ

デジタルアーカイブ
推進協議会広報誌
2002/No.19
<http://www.jdaa.gr.jp>

冬



JDA A

CONTENTS

ミュージアムの近未来像

「デジタル技術とミュージアム」展より

地域の暮らしに根ざした デジタルアーカイブ

中四国・北九州の催しより

ミュージアムの近未来像	2
地域の暮らしに根ざしたデジタルアーカイブ	4
— 日本各地で関連イベントが開催 —	
長崎原爆写真のデジタルアーカイブ	10
青森デジタルアーカイブ推進協議会 発足	11
あいちデジタルアーカイブ活用推進協議会 設立	11
アジア歴史資料センター 情報提供を開始	12
「Digital Content Japan 2002」開催予定	12
事務局だより	12

情報・機器展示、セミナーによる公開プログラム
「デジタル技術とミュージアム」展より

ミュージアムの近未来像



2001年11月13日から12月2日にかけて、東京上野の国立西洋美術館で「デジタル技術とミュージアム」展が開催されました。

本企画展は、近年のデジタル技術の進化が可能にした最新の表示機器や表現手法、および蓄積技術の一端を紹介・展示しようというテーマのもとに、国内外の20余のシステムやプロジェクトを一堂に会した画期的な試みだったといえるでしょう。

今回は、そのうちのいくつかを取り上げてご紹介します。

主催：国立西洋美術館 特別協力：凸版印刷株式会社
協力：(財)西洋美術振興財団



大量画像データの一覧表示が可能に

～国際日本文化研究センターの「画像一覧表示検索システム」～

美術館や博物館には、オリジナル作品をはじめ標本資料や写真、それに付随する各種印刷物まで、ありとあらゆる画像資料が存在しています。こういった資料を有効に活用するために、デジタル化した画像データベースが構築されるわけですが、そのデータ量たるやとてつもなく膨大なものです。

多種多様で、極めて高精細な画像データを蓄積する一方、同時にこれらを効率よく検索・表示するためのシステムが、長い間待たれていました。

今回展示されていた国際日本文化研究センターの「画像一覧表示検索システム」は、ひと言でいえば数多くの画像を同時に一覧することのできるシステム。図像の比較・分類という作業を進めるうえで、この一覧性の確保は重要なファクターとなります。

国際日本文化研究センターでは、このシステムの開発により、同センター所蔵の銀板、湿板、ガラス乾板の古写真など約900枚のサムネイル画像を、超高精細・大画面ディスプレイに一覧表示し、同一画面上でこれらを比較検討することが可能になりました。

表示された各画像は、その内容を認知しうる最小限の大きさに抑えられているので、その分、大量の画像表示を実現しています。

加えて一つひとつのサムネイル画像は、詳細画像と文字情報へのインデックスとしての機能も併せ持っているそうです。

大型貴重書撮影のための工夫

～ゲーテンベルク聖書と慶應義塾大学「HUMIプロジェクト」～

貴重な書物をデジタル化するプロセスにおいて、最も基本的で重要な作業は、全ページを一枚一枚撮影することだといわれています。また、利用価値の高いデジタル画像データを作成するには、各ページについて、可能な限り歪みの少ない正面像を得ることが必須になってきます。従来のように、普通に本を開いて撮影しただけでは、ページ画像に歪みが生じてしまうというわけです。

慶應義塾大学「HUMI(Humanities Media Interface Project)プロジェクト」は、デジタル画像情報処理技術を駆使し、データの歪みを画像上で補正しようという研究を進める一方、ゲーテンベルク聖書のような大型の貴重書を安全、かつ効率的に撮影する手法の開発に力を注いできました。



国際日本文化センターが開発した「画像一覧表示検索システム」のサムネイル画面。任意の写真をクリックすると、さらに詳細な画像と、関連する文字情報が表示される。



1998年、ケンブリッジ大学図書館でのゲーテンベルク聖書のデジタル化の際には、書物台(ブック・クレイドル)と撮影する各ページを、背面から平板へと空気吸引する機構を開発し、実際にこれを使用。撮影ページの平面性を向上させることができました。

また2000年3月のゲーテンベルク聖書(大英図書館所蔵)のデジタル化の際には、スライド式の書物台とスイングアーム式のカメラ架台を新たに開発・製作しました。これは、「本を100度以

上開かないこと」「落下の危険性を考慮して、本の真上にカメラ等の機材を配置しない」という撮影時の条件をクリアした画期的な手法です。これにより、ページ面と完全に垂直・平行方向に、カメラ移動ができるようになったそうです。

■ 巨大形状データと3D画像表現技術の融合

～スタンフォード大学の「デジタルミケランジェロプロジェクト」～

近年のデジタル技術の著しい進化は、新たな文化遺産の蓄積手法＝デジタルアーカイブを生み出したわけですが、その応用展開は現在、立体作品の形状・質感の保存、そして公開へと踏み出しています。

1997年1月、米国スタンフォード大学のマーク・レボイ准教授率いる専門家と学生、大学院生からなる総勢30名超のプロジェクトチームが発足し、活動を開始しました。「デジタルミケランジェロプロジェクト」と名付けられたこの試みは、アカデミア美術館(イタリア・フィレンツェ)所蔵のミケランジェロの傑作・ダビデ像をレーザースキャナーにより3次元撮影し、その形状を完全データ化しようというものでした。

髪の毛からつまさきに至るまで、実に“解像度0.29mmのポリゴンが20億個”という徹底した高精細データ化の技術が、ダビデ像の威厳を損なうことなく、その勇姿を見事なまでに再現しています。

5年間もの下準備を要したというこの膨大な形状データをもとに、今回の展示では、CG技術を融合させたいくつかの試みが公開されていました。なかでもWeb3D技術による立体造形の閲覧システムはユニークです。画面上のダビデ像(立体モデル)を任意に拡大・縮小できるばかりか、マウス操作で自由に回転させることもできます。最新のデジタルアーカイブとその応用技術は、偉大な文化遺産の存在を、より身近に感じさせてくれるものなのかもしれません。



従来のオリジナル作品展示とは一線を画した今回の公開プログラムでは、デジタル時代ならではのミュージアムの未来像と可能性を示すだけに留まらず、そこから派生する倫理や権利問題といったさまざまな課題にも言及しています。

今後のデジタルコンテンツの流通における現実的な一側面として、本企画展では当推進協議会による「デジタル技術と知的財産権」についての考え方も展示されました。



地域の暮らしに根ざしたデジタルアーカイブ

中四国・北九州の催しより

2001年の秋以降、日本の各地でデジタルアーカイブをテーマとするセミナー／シンポジウムが開催されました。それぞれの地域の、個性豊かな文化財をいかに活用し、地域振興に結びつけるか、その方策が話し合われました。

これらのイベントを通し、デジタルアーカイブに携わるパネリストの多くが口にしたのは、地域の人々の暮らしに密接に関連した文化財の重要性です。そして、そのような文化財の意義を、まずほかでもないその地域に暮らす人々に認識してもらうことが、デジタルアーカイブの推進、ひいては地域の活性化にとって不可欠であることが強調されました。

ここでは、中四国および北九州で開催された催しから、特に地域社会との関連や、地域住民へアピール方法に言及したコメントを紹介します。



©島根県松江市教育委員会

住民参加による、草の根的データベース

香 川

■地域に対する効果を、いかに具体的に提案できるか

高松市内に本社を置き、印刷・マルチメディア事業を手がけるアイニチ(株)代表取締役の二ノ宮博之氏は、香川県のまちやくらしの情報を集めたCD-ROM『わがまち百年情報百科』や『瀬戸内の人々のくらしと文化』などを制作しています。

こうした制作物は主に自治体の予算によるものですが、二ノ宮氏は「地方に行くほどデジタルアーカイブに対する意識が低いのが現状」と訴えます。やはりどうしても博物館など形に残るものが優先され、デジタルアーカイブのプライオリティが低くなってしまうためです。

「自分たちのまちの文化を子々孫々に伝えていくという行為は、お金には換算できません。まちのリーダーとして、自治体のトップの方々にこうした理念をぜひ理解していただきたいと願っています」

また一方で二ノ宮氏は、いざデジタルアーカイブを構築した後で、それをどう活用し、どのような効果を上げていくかという点について、制作サイドにももっとプランが必要だと語ります。

「我々ももっと勉強し、こういうコンテンツをつくれば、住民の方々がこのように利用してくれます、また県外から訪れてくれる人も増えますと、より具体的に提案できるようにする必要があります」

■情報公開とデジタルアーカイブ

香川県企画部情報課の小河恵朗氏からは、県が平成9年度より着手し、昨年度に完成した地域文化に関するCD-ROMコンテンツ『讃岐紀行(全8巻)』が紹介されました。

このコンテンツには、名勝・栗林公園、香川漆器などの伝統工芸品、そして郷土料理などが紹介されています。

また、現在すでに完成している『サンポート高松(高松港旅客ターミナル、JR高松駅などの施設群)』の完成イメージ図も収録されていますが、これに関連して小河氏は以下のような問題提起をしました。

「すでに完成しているのだから、イメージ図は意味がないかという、そうは言い切れないと思います。20年後にこれを見た住民の方々が『当時はこう考えていたのか』と興味を持つかもしれません。実際、私が子どもの頃に見た瀬戸大橋のイメージ図は、現在の色彩とはずいぶん違うものでした。デジタルアーカイブの有効期限は、非常に難しい問題だと思います。デジタル化して2、3年目が、一番価値が低くなってしまふ。しかし20年、50年たつと価値が出てくるということもあるはずですよ」

これを受けて当推進協議会の笠羽晴夫事務局長は、以下のように発言しました。

「目新しさがなくなったものでも、アーカイブの視点から誰かがしっかりキープしておくことが必要ではないでしょうか。近年、情報公開の要求が高まっていることは、ある意味でチャンスなのかもしれません。自治体に関係したものは保存・公開するという動きと連動することも、デジタルアーカイブ推進のひとつの方策になると思います」

■たとえばレシピの共有データベース

『讃岐紀行』では、“しっぽくうどん”など郷土料理のレシピも紹介されていますが、小河氏は「レシピが少なく、我が家の味付けとは違う



CD-ROMコンテンツ「讃岐紀行」の内容は、ホームページで見ることが可能(<http://www.pref.kagawa.jp/eizo/normal.htm>)。

たとえば地域住民の方々から、郷土料理に関するさまざまなレシピが寄せられ、保存されるといった共同製作的なデジタルアーカイブも期待される。

という方もいるでしょう。このあたりに、県で行うことの限界を感じています」と語りました。

こうした『讃岐紀行』の情報内容に関して、パネルディスカッションの終わり近く、会場から次のような意見が述べられました。

「すべてを官に頼るのではなく、我々自身が我々の手づくりあげていくということが、普及のためのひとつの大きな要素になると思います。また、今のアーカイブではためることに一生懸命になっている面があるように感じるのですが、それをどこに探しにいけばいいのか、我々一般の者にはまだ十分に情報提供されていないのではないのでしょうか。そこをもっと整備することで、活用が促進されるはずですよ」

この発言を契機に、パネリストの間でさらに意見交換が行われました。

笠羽氏「今のご意見をうかがって気づいたのですが、県がレシピをまとめるのはたいへんというお話に関して、それならば家庭ごとのレシピが自発的に数多く集められるようにすればいいのではないのでしょうか。多様なレシピが揃い、あななるほど海の近くではここが違うんだとわかる。これはまさに、データを豊富に集めて保管すると何かおもしろいことが生じるという、デジタルアーカイブの妙味だと思います」

小河氏「そのような発想の転換は確かに必要ですね。県が出す情報だから正しいというのではなく、多くの意見が集まることで、それ自体がアーカイブを担っていくのかもしれない。共同作業的にデジタルアーカイブを進めることの大切さを感じています」

平成13年度 高松デジタルアーカイブセミナー

「デジタルアーカイブへの取り組みが地域にもたらすものは!!」

IT革命時代における新分野の進出をめざして、地域のコンテンツをデジタル化し、その利活用をすることで、地域の活性化や新産業の創出を図り、ここに地方においてデジタルアーカイブへの取り組みを始めることの意味や、これらを実現するための新しい技術の集積等を行うべく実施しました。

主催：中四国デジタルアーカイブ推進協議会、デジタルアーカイブ推進協議会

共催：香川県、香川マルチメディアビジネスフォーラム

日時：2001年10月23日

会場：香川県歴史博物館B1F講堂

■基調講演 「地域文化の創造とデジタルアーカイブー

進化するデジタルコンテンツの表現技術ー

長 幾朗／早稲田大学国際情報通信研究センター教授

■パネルディスカッション

コーディネーター 長 幾朗／早稲田大学国際情報通信研究センター教授

パネリスト 笠羽 晴夫(デジタルアーカイブ推進協議会事務局長)

「地方のデジタルアーカイブの取り組みとその成果」

小河 恵朗(香川県企画部情報政策課課長補佐)

「讃岐紀行ー香川デジタル映像館三カ年の足跡ー」

二ノ宮 博之(アイニチ株式会社代表取締役)

「ビジネスとしてのデジタルアーカイブへの取り組み」

丸川 真佳(株式会社アートテレビ代表取締役)

「デジタルアーカイブ分野へのチャレンジを本格化」



デジタルアーカイブが遺跡を守る

島 根

■豊かな埋蔵文化財を、地域の新しい力に

1984～85年の荒神谷遺跡、96年の加茂岩倉遺跡、そして2000年4月には出雲大社で巨大柱根が出土するなど、島根県では10年に1度、考古学上の大発見があるとされています。こうした一連の発掘調査に携わってきた田中義昭氏(元 島根大学教授)は、しかし島根の埋蔵文化財は決してこれだけではないと強調します。

「島根県では、ほぼ毎日どこかで発掘調査が行われています。大田市には世界遺産の登録を目指す石見銀山遺跡があり、その西の浜田市には古代の石見の国の国府跡があり、さらに西には中世の豪族・益田氏の遺跡がある。これらの埋蔵文化財を地域の共有財産として、心の糧として、いかに地域を再認識していくかが今後の課題です」

島根県は現在、過疎の問題にも直面しています。田中氏は、「新しい地域の力を生み出すことでマイナスの側面を克服したい」と語ります。

■デジタル映像が地域住民の意識を変えた

埋蔵文化財はほとんどの場合、土器や陶磁器の断片として出土します。これらのパーツをまず写し取り、さらにそれらを組み合わせて復元図をつくる。この図化の作業に現状ではたいへんな時間がかかり、デジタル技術でいかに効率化できるかが学会で検討されています。

さらに復元された埋蔵物をもとに、往時の様子を再現する段階でも、デジタル技術に寄せられる期待は少なくありません。

「発掘調査では、長い間そこで生活し、死んでいった人のトータルの結果が、動かない状態として掘り出されます。この結果から逆にたどり、ひとつの歴史像を組み立てる。そうすることで初めて、一般の人が『なるほどこういう時代に、こういう人たちが使っていたのか』と実感できるのです。デジタル技術をうまく利用すれば、非常に生き生きとした歴史像を提供できるのではないかと常々感じています」

すでにCG化された歴史像が住民たちの関心を引き、意識を変え

たケースもあります。松江市の田和山遺跡は、三重の濠を張り巡らした弥生時代の環濠遺跡です。発掘調査から、この遺跡は他の環濠遺跡とは異なり、住民が濠の外側で生活していたことがわかりました。



「田和山の頂上から、祭りに使われた度縄や土器が発見されています。田和山は祭りをを行うための場所であり、この山自体が弥生人たちにとってとても大切な場所だったのでしょうか。実は荒神谷遺跡や賀茂岩倉遺跡で発掘された青銅器も祭りで使われていました。そこで田和山遺跡が発掘調査された際、その写真や図面をもとに、この遺跡はどのようにつくられたのか、青銅器を使ってどのように祭りが行われたのかを想定し、再現映像を制作しました。この映像が、地域のみならずに古代の出雲をイメージしてもらおうととても役立っています」

実は田和山遺跡がある場所に病院が建てられる計画があったのですが、映像を見た住民たちが遺跡を壊さないでほしいと訴えたことで、県指定の遺跡として保存されることになったといいます。

「生活に密着したところで地域の歩みを感じとってほしい。そして自分たちで地域を開いていくという方向に目を開いてほしい。そのためには、デジタル技術を大いに活用することが大切だと実感しています」



約2000年前の田和山遺跡。環濠の外に住居跡が見つかるという全国的にも珍しい遺跡であると同時に、青銅器の祭りを行っていた出雲社会を考える上で非常に重要な鍵を握っている。
©島根県松江市教育委員会



テクノアークしまねから未来発信 デジタルアーカイブセミナー

「地域文化を軸とした次世代型ビジネスの創出」

デジタルアーカイブの課題と手法

島根県には、すばらしい自然や建造物等が現存しているのみならず、古代文化の粋とも言える遺跡や埋蔵物が山積している魅力ある地域と言えます。このような地域独自の財産である素材を、地域の活性化や新産業創出に活かすべく、「地域文化を基軸にした次世代型ビジネスの創出—デジタルアーカイブへの課題と手法—」をテーマにセミナーが開催されました。

主 催: 中四国デジタルアーカイブ推進協議会、

デジタルアーカイブ推進協議会、島根県、(財)しまね産業振興財団

共 催: デジタル・ミュージアム推進協議会

日 時: 2001年11月13日

会 場: テクノアークしまね本館西棟

■基調講演 「文化を支えるIT産業とデジタルアーカイブ—バーチャルリアリティ・コンテンツ「唐招提寺」—」
服部 美佐(凸版印刷株式会社本社メディア表現センターIML主任)

■リレートーク

コーディネーター 石野 眞(島根大学名誉教授)

パネリスト 今西 良男(奈良県教育委員会文化財保存課課長補佐)

「唐招提寺の修復プロセスとデジタルアーカイブ」

田中 義昭(元島根大学法文学部文化財研究室教授)

「埋蔵文化財の復元手法と課題—デジタルアーカイブへの期待—」

松井 洋泰(京都府中小企業総合センター

産業支援部産業振興課デザイン係技師)

「京都陶磁器バーチャル美術館」

自然史標本が伝える江戸の風情

北九州

■シーボルトが残したJAPAN

夏休みに採取した昆虫を標本にしたのはいいが、翌年見たらばらばらになっていた。そのような経験をもつ人も少なくないでしょう。生物の標本のなかでも、昆虫のそれは壊れやすいものの代表です。しかし約180年前、江戸時代末期に、シーボルトによって日本で採集された昆虫標本の数々が、触角も崩れないほど優れた保存状態で、オランダの国立自然史博物館(ライデン市)に残されています。

「まことに残念なことに日本では、明治時代にあまりに近代化を急ぎすぎたため、こうした自然史の標本の保存ということをほとんど行ってきませんでした」(北九州市立自然史博物館 学芸員・上田 恭一郎氏)。

タガメやカメムシなど、かつては当たり前のように見られた昆虫も、現在ではすっかり珍しくなりました。しかも江戸時代のまとまった昆虫標本は日本には存在しません。シーボルトの自然史標本は、当時の昆虫の分布や生態を探るための、つまり180年前の日本の自然がどのようなものだったのかを知るための非常に貴重な手がかりなのです。

上田氏は、このシーボルトの自然史標本のデータベース化に取り組んでいます。しかし、動植物も含めて残されている標本は1万6200点ものばり、実に根気を要する作業となります。

「もう標本箱の山ですね。2万ほどある標本箱をすべて開けました。そして、シーボルト「ジャパン」と書かれた小さなラベルを見つければ、その標本の写真をどんどん撮っていきます。膨大な標本のなかに、たった一匹だけミツバチが収められているということもありました」

シーボルトが収集した資料や標本のうち、ほ乳類や鳥類などは『日本動物誌』にまとめられています。昆虫は未発表のものが多かったといいます。そのなかには、シーボルトが新種として自ら学名をつけたナガサキアゲハなども含まれていました。

■かつての小倉の街・文化

オランダ国立自然史博物館には、絶滅したニホンオオカミなどの

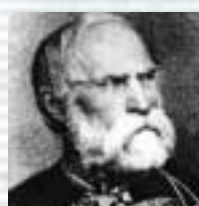


はく製を標本にしたものもありました。

「かつては隠岐郡の竹島などで年間千頭ほど採れたのに、乱獲のため絶滅してしまったニホンアシカのはく製も保存されています」

はく製の標本からは、自然という範疇だけにはとどまらない、人間の営みも見えてきます。上田氏は、はく製などの写真を示しながら、こうしたデータベースのおもしろさと意義を強調しました。

「シーボルトは小倉に一晩泊まったことがあるのですが、そのときに実はこういった鶴を小倉の街で購入しています。180年前の北九州では、このような鶴を売る店があったわけです。このように標本によって、かつての街のあり様までも全部わかる。つまりシーボルトの標本というものは、自然史関係に加えて当時の文化、風習などを全部集めた形での、非常におもしろいデータの塊であるわけです。私たちがなくしてしまった日本というものが、こうした標本をもとに復元できるかもしれない。そういった意味からも、こういったデータベースを整備していきたいと考えています」



シーボルト Philipp Franz von Siebold 1796～1866

江戸時代後期(1823年)、出島のオランダ商館付医官として派遣されたドイツ人。日本に西洋医学を伝える一方、日本の歴史・地理・民俗・動植物などを幅広く研究した博物学者でもある。6年間の日本滞在中に収集した資料は木箱数百個ともいわれる。帰国後その膨大な資料をもとに『日本』『日本植物誌』『日本動物誌』など多くの書籍を出版。西洋における日本研究の第一人者となった。



九州・国際テクノフェア IT 2001 デジタルアーカイブシンポジウム

「デジタルアーカイブの戦略的推進と地域振興」

九州の文化ポテンシャルを情報発信

2001年11月8～10日に北九州市で開催された九州・国際テクノフェアIT2001のなかで、当推進協議会主催のシンポジウムが実施されました。デジタルアーカイブを戦略的に推進することによる新たな地域文化の創造や地域産業の創出の可能性を各分野の専門家に語っていただきました。

主催: デジタルアーカイブ推進協議会、マルチメディア・アライアンス福岡

共催: IT2001実行委員会

日時: 2001年11月8日

会場: IT2001会場特設ステージ

■基調講演 「デジタルアーカイブと地域振興」

笠羽 晴夫 (デジタルアーカイブ推進協議会事務局長)

■パネルディスカッション 「九州の文化を競争力に」

コーディネーター 坂井 滋和 (マルチメディア・アライアンス福岡 プロデューサー／早稲田大学国際情報通信研究センター 教授)

パネリスト 上田 恭一郎 (北九州市立自然史博物館 学芸員)

大野 康 ((株)ケイ・ビー・シー映像 メディア事業部長)

金村 公一 (県立長崎シーボルト大学 情報メディア科 助教授)

笠羽 晴夫 (デジタルアーカイブ推進協議会事務局長)

小林 重紀・北田 綾 (早稲田大学大学院)

日本各地でデジタルアーカイブ 関連イベントが開催されました

京都デジタルアーカイブ研究センター 設立1周年記念シンポジウム

Whole Digital Archives Catalogue～世界に一つしかないものたちに～

京都デジタルアーカイブ研究センターの設立1周年記念事業として、著名な講師陣を招いて、シンポジウムが開催されました。

主 催：京都デジタルアーカイブ研究センター
日 時：2001年8月28日
会 場：キャンパスプラザ京都

■プレゼンテーション

「IT革命のアナロジー」

森広 芳照（京都大学大学院情報学研究科教授）

「京都から世界に飛び出したDigital Archives Project — Digital Museum & Digital Fashion —」

天野 昭（京都デジタルアーカイブ研究センター顧問／月刊「ニューメディア」発行人／佛教大学教授）

「文化と記憶次世代アーカイブ・システムをめぐる」

武邑 光裕（京都デジタルアーカイブ研究センター顧問／東京大学大学院新領域創成科学研究科助教授）

「デジタル社会のキーパーソン — エージェント研究の最前線 —」

石田 亨（京都大学大学院情報学研究科教授）

「コンテンツIDにかかわる世界動向」

安田 浩（東京大学教授／国際・産学共同研究センター 副センター長）

「デジタル技術と近未来モデル — 日本からの情報発信のために —」

北川 善太郎（京都デジタルアーカイブ研究センター顧問／財団法人比較法研究センター理事長／財団法人国際高等研究所副所長）

■パネルディスカッション「デジタルアーカイブの最先端」

モデレーター 長尾眞（京都デジタルアーカイブ研究センター所長／京都大学総長）

パネリスト 天野昭、石田亨、北川善太郎、武邑光裕、森広芳照、安田浩



平成13年度 ながさきITフェア （第3回ながさき国際情報通信フェア）

デジタルアーカイブと地域振興 ～文化を長崎の力に～

2001年10月26～27日に開催された「第3回ながさき国際情報通信フェア」の一環として、デジタルアーカイブに焦点を絞った講演会が開催されました。

主 催：長崎県高度情報化推進協議会、
ながさき国際情報通信フェア部会
後 援：デジタルアーカイブ推進協議会、等
日 時：2001年10月26日
会 場：NBCビデオホール

■講 演

「デジタルアーカイブと地域振興 ～文化を長崎の力に～」

笠羽晴夫（デジタルアーカイブ推進協議会 事務局長）

平成13年度 広島 情報最前線——デジタルコンテンツ

このセミナーは、IT推進のキーワードであるデジタルコンテンツの発信により、次世代型ビジネスの創出を目的にデジタルコンテンツ流通を促進するネットワークのあり方、起業家の育成、デジタルコンテンツの利活用分野の掘り起こし等について先進事例を啓発することにより、企業や地域のIT推進や経済の活性化、産業振興、異業種間交流に当たってのヒントを提供するものです。

主 催：中四国デジタルアーカイブ推進協議会、
企業環境デザイン研究会
中国総合通信局、中国情報通信懇談会、
デジタルアーカイブ推進協議会

日 時：2001年11月20日
会 場 広島国際会議場

■基調講演 「地域文化の創造とデジタルアーカイブ

—進化するデジタルコンテンツの表現技術—

長 幾朗／早稲田大学国際情報通信研究センター教授

Media Trigger'01新映像塾 オープンセミナー

新映像とデジタルアーカイブ

このセミナーは、IT推進のキーワードであるデジタルコンテンツの発信により、次世代型ビジネスの創出を目的にデジタルコンテンツ流通を促進するネットワークのあり方、起業家の育成、デジタルコンテンツの利活用分野の掘り起こし等について先進事例を啓発することにより、企業や地域のIT推進や経済の活性化、産業振興、異業種間交流に当たってのヒントを提供するものです。

主 催：上田地域新映像産業推進協議会
共 催：(財)長野県テクノ財団
(浅間テクノポリス地域センター)
信濃毎日新聞社
上田市マルチメディア情報センター
協 賛：デジタルアーカイブ推進協議会、
上田商工会議所
日 時：2001年11月3日
会 場：上田市マルチメディア情報センター

■演題1 「文化遺産再現とコンピューターグラフィックス」

戸村 義男(日本放送協会 放送技術局 番組送出センター 運用技術 CGグループ 副部長)

■演題2 「デジタルアーカイブにおける地域素材活用の意義」

笠羽 晴夫(デジタルアーカイブ推進協議会 事務局長)

■演題3 「上田市マルチメディア情報センターの成果作品紹介」

井戸 芳之(上田市マルチメディア情報センター)

島IT啓発セミナー

の流通と次世代型ビジネスの創出

■リレートーク

コーディネーター

小坂 和子

(中四国デジタルアーカイブ推進協議会コーディネーター局長)

パネリスト

「広島における通信・放送融合サービス実験の取り組みについて」

森 貞美(NIT西日本広島支店 ソリューションビジネス部門長)

「ネットワーク時代のデジタルアーカイブ

高精細画像処理3D及びバーチャルリアリティー」

竹田 仰(長崎総合科学大学人間環境学部環境文化学科教授)

「ITベンチャーゾーンサッポロバレーの展望

ー札幌ビズカフェの活動ー」

高橋 昭憲(株式会社データクラフト代表取締役)

「デジタルアーカイブによる地域活性化への活動状況」

笠羽 晴夫(デジタルアーカイブ推進協議会事務局長)

あいちデジタルアーカイブ 活用推進協議会(ADAA)設立記念 デジタルアーカイブの活用による 地域活力の創生をめざして

「あいちデジタルアーカイブ活用推進協議会」が設立されたことを記念して、関連諸団体とデジタルアーカイブの活用を支援する行政・学識者の皆さまとともに、情報を交換し、交流を深める場として、設立記念講演会・交流会が開催されました。※11Pに関連記事を掲載

主 催：あいちデジタルアーカイブ活用推進協議会(ADAA)、
中部経済産業局、デジタルアーカイブ推進協議会
後 援：中日新聞社
日 時：2001年12月7日
場 所：愛知県産業貿易館

■「愛知県地域におけるデジタルアーカイブの事例発表」

■講演1 「デジタルアーカイブと地域活力の創造」

武邑 光裕(東京大学大学院新領域創成科学研究科助教授)

■講演2 「日本のデジタルアーカイブの現状と展望」

笠羽 晴夫(デジタルアーカイブ推進協議会事務局長)

長崎に原爆が投下された直後撮影された貴重な写真が、シニアパソコン教室の課程でデジタル化されました。e-Japanで全国へのIT普及が叫ばれる中、それになじめない人達の問題、いわゆるデジタルデバインドがクローズアップされていますが、この試みはこの観点からも注目されています。

この課程は「デジタルシニア養成講座」と呼ばれるもので、(株)富士通ラーニングメディア(FLM)が(社)長寿社会文化協会(会長 一番ヶ瀬 康子)と連携して開発し、経験を積んだ高齢者の知見とIT普及啓発を結びつけることをそのねらいとしています。

この講座の第一回として「長崎原爆写真」を取り上げ、元カメラマン林 重男氏(83歳)が撮影した長崎被爆直後の写真400枚を氏の全面的な協力のもとにデジタル化しました。講座が実施されたのはパソコン教室富士通オープンカレッジ東京・表参道校で、2001年5月末から2ヶ月間、50歳から70歳代11名のシニアが受講し制作に取り組みました。

受講者はこれまでパソコンに興味がなかったり操作に詳しくない人達ばかりでしたが、講座終了時には高精細デジタル技術を活用した映像制作・加工・編集技術を習得することができま

した。今回の成果は2001年8月9日、長崎原爆記念日の前に長崎原爆資料館に寄贈されました。

パソコン教室において特にシニアが対象になる場合、習得の目的が単にワープロ、表計算、メールなどではその動機付けとして充分でないことがこれまで指摘されてきました。その一方、画像処理中心でありしかも歴史的な知見が発揮できる今回のような対象はシニアのやる気を刺激し、今後にも期待を抱かせます。

また、デジタルアーカイブ推進にとっても多くの様々な資産をデジタルデータ化するにあたっては、

必要な手間やコストから今後はボランティアの協力が必須であり、対象物によってはシニア・ボランティアが最適な場合も数多くあります。残すべきものを残す意志がある人が自らアーカイブする、ITの普及はこれを可能にするしまたそうあるべきでしょう。

この講座では引き続き大学のシニア同窓生による学校の年代史などを計画しています。このような動きが全国に広まることが望まれます。

問合わせ先 (株)富士通ラーニングメディア

宮岸 一孝 (E-mail: miyagisi@flm.fujitsu.com)

長崎原爆写真の デジタルアーカイブ

シニアパソコン教室の試み

デジタルシニア養成講座



7月初めの特別講座。
長崎原爆写真の提供者、林重男さんを囲んで



(社)長寿社会文化
協会の 一番ヶ瀬
康子会長



実験デジタルデータを
長崎原爆資料館へ寄贈

青森デジタルアーカイブ 推進協議会 発足

三内丸山遺跡や白神山地などの
魅力を世界に発信

青森県の文化や自然情報などをデジタル技術で半永久的に保存、これらを活用して新たな産業の創出を目指す「青森デジタルアーカイブ推進協議会」の設立総会が9月26日、ホテル青森で開かれました。産学官が連携した活動によって、今後「デジタルアーカイブ」の構築が図られれば、同県の産業経済の活性化にもつながるものと期待されます。

協議会には県内の大学など研究機関、行政、情報関連産業、報道機関、経済団体、広告・印刷業界など70社(団体が加盟。この日、関係者約100人が出席した設立総会では発起人を代表して県情報サービス産業協会会長の南勉氏が「本県には三内丸山遺跡や白神山地などの遺産が数多くあり、これらの情報をデジタルアーカイブで蓄積するとともに、その魅力を世界に発信していきたい」と挨拶。木村守男知事、全国地域情報産業団



南勉 会長

記念講演会



体連合会の辻正会長らが祝辞を述べました。

引き続き規約や事業計画など決定、役員の選任を行って初代会長には南氏を選出しました。事務局は青森商工会議所内に置くことも決まりました。

事業計画では、2003年度までの期間、デジタルアーカイブの普及・啓蒙活動、人材育成、知的所有権などデジタルアーカイブに付随する課題の研究、実証事業などを積極的に進めることにしております。

総会後、同ホテル孔雀の間に350名の出席でデジタルアーカイブ先進地である岐阜県の梶原拓知事による「地域振興とデジタルアーカイブ」と題して記念講演を行いました。

問い合わせ先 高根 孝一 E-mail : takane@acci.or.jp



株式会社エイ・ワークス代表取締役
赤崎まき子 氏



ADAA代表幹事
株式会社シーティーアイ
山上正視 氏

あいちデジタルアーカイブ 活用推進協議会(ADAA)設立

デジタルアーカイブの活用による
地域活力の創生をめざして

設立記念講演会・交流会

12月7日(金)に開かれた設立講演会では、ADAA代表幹事山上正視氏、中部経済産業局情報政策課稲井田恵一氏の挨拶に続き、地元3社((株)ナカシャクリエイト、(株)エイ・ワークス、(株)シーティーアイが事例を発表。

講演は、東京大学メディア環境学助教授武邑光裕氏による「デジタルアーカイブと地域活力の創造」と、デジタルアーカイブ推進協議会事務局長笠羽晴夫氏「日本のデジタルアーカイブの現状と展望」で、地域の情報発信力の核としてデジタルアーカイブが擁するパワーを改めて認識する機会となりました。

今後も各種研修と年1回の講演会・交流会を予定しており、2003年には全国の関連団体を集めたイベントを開催したい意向。

問い合わせ先 山上 正視 E-mail : yamakami@chance.cti.co.jp

地域のさらなる活性化をめざし、デジタルアーカイブの活用を共に進めよう!という趣旨で、愛知県に拠点を置く関連団体、行政機関が有識者と一体となり、今年10月「あいちデジタルアーカイブ活用推進協議会」が設立されました。

構成メンバーは、愛知県情報サービス産業協会・中部映像関連事業社協会、中部マルチメディアコンソシアム・東海北陸データベース懇話会の4団体と、中部経済産業局・愛知県・名古屋市など。具体的なビジネス創出に向けて主要なデジタルコンテンツ関連団体が連携したこの協議会には関心が集まり、設立講演会・交流会も、100名の定員をオーバーする参加者で熱気のこもった会となりました。

11月30日からインターネットによる情報提供を開始

近現代の日本と近隣アジア諸国との関係に関する公文書を、インターネットを通じて提供する電子資料センター『アジア歴史資料センター』が2001年11月30日、サービスを開始しました。

国立公文書館、外務省外交史料館、防衛庁防衛研究所が保管する明治期から第二次世界大戦終結までの資料のうち、10万点以上(フィルム約200万コマ分)について24時間無料で検索・閲覧が可能です。資料のなかには、外交文書や旧陸海軍資料、台湾・朝鮮両総督府の内部文書などが含まれています。

また、今後もデジタル化・画像化が済んだものから順次資料を拡充していきます。



<http://www.jacar.go.jp/>

「Digital Content Japan 2002」

今年3月に開催予定!!

進展する情報通信関連技術とともに変化するデジタルコンテンツの制作環境を、制作から流通、利活用までのフェーズを見通すものとして、シンポジウムとワークショップの双方から総合的に紹介します。

主 催：財団法人デジタルコンテンツ協会
デジタルアーカイブ推進協議会

会 期：2002年3月11日(月)、12日(火)

会 場：機械産業記念館「テピア」

東京都港区北青山2-8-44

詳細は、追って当推進協議会のホームページにてお知らせします。
(<http://www.jdaa.gr.jp/>)

事務局だより

各地域での取り組みや美術館での取り組みについて取り上げました。地域として、新たに青森と愛知にデジタルアーカイブ推進のための団体が設立されました。

地域には独自の文化が存在し、それらはすべてデジタルアーカイブの対象になると思います。地域文化の独自性を保存していくためにも、地域に根ざした活動が行われることを期待したいと思います。

12月11日にデジタル・シルクロード東京シンポジウムがユネスコ/国立情報学研究所の主催(当協議会の後援)で開催されました。内容については、次号(20号)で掲載しますが、シルクロードにおける文化財の保存の取り組みについて各講演者によって報告されました。中でも「アフガニスタンの文化財」は興味深く聞きました。調査時点では存在していたものが、現時点では存在しない、または存在が確認できないと思われるとのこと。地球上の文化財がいろいろな事情があるとはいえ、消滅してしまうことは、非常に残念なことです。現物が存在しなくなったとき、唯一写真として残っている情報を、将来へ保存していくことの重要性を、痛烈に感じました。そのためにも「デジタルアーカイブ」が果たす役割は重大であると感じた一日でした。

お詫び 前号(18号)におきまして、文化庁・西田亮三氏と総務省・三和英治氏の写真が入れ替わっていました。郵送配付分は、入れ替わったままでしたが、その後、各地域のイベント等で配付しました広報誌につきましては、正しい写真に訂正しています。ご本人、関係者各位にご迷惑をおかけしましたことをお詫びいたします。

■現会員一覧(平成13年12月現在)

(株)イマージュ/(株)NHKエンタープライズ21/(財)NHKエンジニアリングサービス/(株)NHKテクニカルサービス/(株)NTTデータ/(株)オーエムシークリエイティブ/岡村印刷工業(株)/(学)河合塾/三洋電機(株)/清水建設(株)/シャープ(株)/ソニー(株)/大日本印刷(株)/(株)テイ・エス・エス・プロダクション/(株)電通/(株)電通テック/(株)東芝/(株)東北新社/凸版印刷(株)/ナカシャクリエイティブ(株)/(株)ナック映像センター/日本電気(株)/日本アイ・ビー・エム(株)/日本政策投資銀行/日本ビクター(株)/(株)日立製作所/(株)PFU/富士写真フイルム(株)/富士通(株)/松下電器産業(株)/三菱電機(株)/ライブピクチャー・ジャパン(株)

32社

石川県/香川県/岐阜県/埼玉県/島根県/奈良県/上田市/大垣市/京都市/鳥取市/高遠町 11自治体

(財)日航財団/デジタル・ミュージアム推進協議会/(財)芸術研究振興財団/(財)デジタルコンテンツ協会/青森デジタルアーカイブ推進協議会

5団体

合計：48会員

表紙作品について

伊藤若冲 派 「樹花鳥獸図屏風」(右隻 部分)
静岡県立美術館 蔵

モザイク風に描かれた絵柄(升目画)は、伝統的な花鳥図をデジタル画像処理したようにも感じられる。この独創的な画風は、中国産の織物から想を得たという説もある。作者については議論もあるが、他の若冲の絵柄が登場することなどから、異才の画家・若冲と深い結びつきのあることは間違いない。



デジタルアーカイブ推進協議会のWebサイト <http://www.jdaa.gr.jp/> 最新情報や本誌のバックナンバーがご覧いただけます。

発行所：デジタルアーカイブ推進協議会(略称：JDAA) Japan Digital Archives Association

〒102-0094 千代田区紀尾井町3-6 秀和紀尾井町パークビル8F (財)デジタルコンテンツ協会内

発行人：事務局長 笠羽晴夫 編集：広報部会 表紙題字：平山郁夫会長 表紙写真提供：静岡県立美術館

TEL: 03-3512-3906 FAX: 03-3512-3908

デザイン・印刷：(株)オーエムシークリエイティブ

(本紙記事の無断転載・訳載を禁じます)